

占領期の金閣寺と金閣寺界限 —南相旭著『三島由紀夫における「アメリカ」』 第2章を読むために

西川祐子

1. はじめに一三島由紀夫『金閣寺』（1956年）を読む南相旭による 『三島由紀夫におけるアメリカ』（2014年）を読む

わたしは小説テキストとその小説の批評テキストの両方を占領期京都研究の立場からコメントするように、という要請をうけた¹⁾。小説作品とその批評作品をあつかうという二重のテキスト分析は、聴衆にとっても、コメンテータにとっても、なかなか重い作業である。思案しているうち、シンポジウムが金閣のある鹿苑寺に近いという立地条件のある立命館大学で行われるのだから、占領期京都地図の上に小説を置き、報告者である南相旭氏（以後、敬称をはぶく）と会場のみなさんと一緒に占領期京都の地図の上で、金閣寺界限を歩くという考えが浮かんだ。この小論はしたがって、テキスト内とテキスト外とを往復しながら、小説とその批評をコメントする試みである。地図の上に小説をおいてみると、観念小説の作家といわれ、じっさいそうであった三島由紀夫がこの小説を書くにあたっては、綿密な取材を行っていることがわかる。京都をよく知る優秀なガイドあるいはガイドグループが取材に同伴していた可能性が大きいと思われるほどである。

京都占領期地図の作製は、矢野桂司研究室（立命館大学文学部地理学専攻）、河角直美氏（立命館大学文学部京都学専攻、以後敬称をはぶく）と協力して行った。河角論文を参照いただきたい。連続講座の当日には河角直美とわたし西川祐子は一つのパワーポイントを協同で制作し、コメントを行ったのであるが、論文執筆にあたっては小説と批評のコメントは主に西川が、金閣寺界限という場所の解説は主に河角が執筆することとした。

テキスト外に出ることについては報告者である南相旭の同意をいただけるだろう、とわたしは考えた。南相旭自身、著書の序文で「本書はテキストが表象する『アメリカ』を、その作品の外側にある、社会的・文化的な文脈を強く意識して読もうとする意味においては、方法論的には文化研究に属すると言える²⁾」と書いて、自分の批評作品が「作品の外側」を重視し、テキストをテキスト外の文脈におくと述べているからである。南相旭の著書の第二章は「『金閣寺』における『アメリカ』—占領期の『アメリカ』表象という問題」と題されており、その第一節「三島由紀夫の『美』の物語から『占領』を語る物語へ」は、『美』という三島由紀夫にいわせれば普遍的概念の物語を「占領」というきわめて時事的で政治的である物語に読み替えている。先の引用とあわせ考えると、南相旭は文学研究＝文化研究であり、さらに言うならば文化＝政治なのだから、文化研究はまた政治研究のひとつの形に他ならないと主張していると思われる。

わたしは南相旭の主張に啓発され、これに共感し、これを支持しながら現実の歴史地図の上に小説をおいて読んでゆきたい。南相旭が日本の旧植民地であり、連合国軍による日本占領期におなじGHQ／SCAPの統治下におかれた朝鮮半島に視座をおく個人として、小説『金閣寺』に文化の政治を読もうとするのだとすれば、わたしは連合国軍による占領下の京都住民たちの視座をかりた個人として、同様の試みをしてみよう。

2. 小説『金閣寺』における雪の場面

南相旭は、三島由紀夫の小説『金閣寺』を論じるにあたって、この小説は占領期の「アメリカ」を正面から表象しようとした数少ない文学作品の一つであったのだが、その側面は長らく無視されてきた、とする。その上でさらに、第二章第四節を「『日本文化』を表象する『アメリカ』」と題した。つまり連合国軍による日本占領は日本の武装解除と民主化を目指しただけでなく、占領軍とくにアメリカは戦後の「日本文化」の創出と表出を目指したという主張である。問題は二つあり、「まず一つは、アメリカによって理解され、守られた『日本文化』を『良き遺産』と表象することによって、アメリカの判断によって破壊された『日本文化』を迂回するような形で意味づけている点である。そしてもう一つは、文化における破壊ないし滅亡の意味が、まったく考慮されていない点である³⁾」という重要な指摘がなされている。じっさい破壊と滅亡の歌をうたった坂口安吾をはじめとする焼け跡無頼派の文学は、後の時代に編纂される日本文学史においてはしばしば片隅におかれた。そして焼け跡無頼派の次世代、新古典派として戦後日本文化王道の樹立を目指したのが三島由紀夫であった。

南相旭はつづけて「『金閣寺』を通して三島が提示した問題は、占領軍がもたらした『アメリカ文化』の問題ばかりではなく、占領軍がもたらした『日本文化』の問題でもあり、占領軍の好みに合わせて、自分の姿、すなわち『日本』を演じざるを得なくなった状況そのものをも問題として含んでいた⁴⁾」と、さらにつっこんだ指摘をする。じつ、小説『金閣寺』の後、死に至るまで小説家三島由紀夫は自ら「日本」を演じる。南相旭はすでに「つまりこの時期⁵⁾の三島は、アメリカの文化人に対し『ネイティヴ・インフォーマント』としての役割を果たすようになるのである⁶⁾」という三島由紀夫インフォーマント説をたてていた。

では小説作品のなかでは「アメリカ」と「日本」、そして「ネイティヴ・インフォーマント」はどのように表象されるのか。南相旭が三島の小説からもっとも長く引用する雪の朝の場面には三人の登場人物が描かれている。「ジャック」と呼ばれる「米兵」、寝間着の上に赤い外套すなわちコートをはおった「女」、そして小説の主人公である「私」である。「私」のモデルが、1950年7月2日に鹿苑寺内の金閣に放火した同寺の住み込み修行僧、大谷大学学生であった林承賢であることは言うまでもない。三島由紀夫は「アメリカ」／「通訳＝インフォーマント」／「日本」を三人の登場人物にふりわけて造型した。

小説において登場人物「私」は雪の朝、門番から寺にジープを乗りつけた米兵の通訳をするように頼まれる。しかし英語で書かれたパンフレットを「私」からとりあげた米兵は、自分で声高におもしろおかしく節をつけて英文をよみあげ女と戯れている。手持無沙汰の「私」の目前でやがて米兵と女の口論がはじまり、女に横面を張られた米兵は女を雪の上に投げ倒し、「私」

占領期の金閣寺と金閣寺界隈—南相旭著『三島由紀夫における「アメリカ」』第2章を読むために（西川）

にむかって妊娠している女の腹をつよく踏めと命じる。小説の記述が主人公の一人称を採用しているため、「私」が生きている女の腹をふむ感覚がじかに読者に伝わる場面である。横たわる「女」と女を踏む「私」をみおろす大男の「米兵」の背後、雪をいただいた金閣の上には洗われたように青い冬空がある。女は後に流産の原因は雪の日に米兵から被った暴力であり、暴力に追従し、直接に暴力を自分に加えた青年僧を非難して住職に訴える。住職は雪の日に米兵が学僧に与えたアメリカ製煙草チェスタートン2包みを受け取っていたのだが。

雪の上に倒された赤いコートの女が被占領下「日本」の表象であることは、青年僧がおぼえたばかり尺八の練習曲に唱歌「白地に赤く」をえらんで繰り返しかえし吹くという行為で説明される。「白地に赤く日の丸染めて」は日章旗の歌である。赤いコートの女は雪風景のなかでは日章旗と同じ配色なのだ。「米兵」が「アメリカ」、そして「私」は「通訳」である。さらに占領期に翻訳され、広く読まれていたベネディクト・アンダーソンの『菊と刀』になぞらえるなら、「アメリカ」すなわち文明の高みから「未開」文化をみおろす「文化人類学」、通訳は現地採用の「ネイティブ・インフォーマント」、そして「日本」すなわち原住民と見なすこともできよう。

3. 小説家の取材，現地調査

小説『金閣寺』は三島由紀夫全集第六巻に収められた。巻末には「『金閣寺』創作ノート」と田中美代子による「解題・校訂」が付されている。創作ノートには「小説『金閣寺』 ○主題 美への嫉妬⁷⁾」とある。同ノートには三島由紀夫が描いた鹿苑寺の図、寺内の金閣をふくむ主な建物の平面図、さらに詳しく各部屋の畳の数、間取りを書き込んだ鹿苑寺室内図が挿入されている。取材のためのスケッチは全集に収められたものの他に、主人公のモデルが通学した大谷大学の見取り図などがあるらしい。三島由紀夫自身が後に「私の取材はそういふ意味では、植物採集や昆虫採集に似てゐる⁸⁾」と述べている。三島の取材旅行は主人公のモデルが幼少期をすごした丹後半島、舞鶴方面にも及んでいるのだが、ここでは金閣寺界隈のみをとりあげる。三島由紀夫は創作ノートに警察が金閣寺放火犯人からとった供述調書を丁寧に書き写しているが、その後の取材の記録もまた警察の調書同様に、出来事の年月日、時間、そして場所の記述が詳しい。

主人公が犯行の前に行く遊郭のまち、五番町については「金閣寺から五番町迄歩いて三、四十分。白梅町^{はくばいちょう}より歩いて十五分位⁹⁾」と正確である。小説家は、鹿苑寺だけでなく、主人公の生活圏をくまなく歩いてみたようだ。金閣寺から北大路烏丸にある大谷大学を含めて主人公の生活圏は金閣のある鹿苑寺から半径約4キロメートルの範囲である。昔の人は一里約四キロメートルを一時間で歩いたと言ったものである。三島由紀夫の取材旅行は、金閣寺放火事件発生の5年後、対日講和条約発効による連合国軍による日本占領が終わった3年後にあたる1955年であった。炎上した金閣寺再建の年である。文芸評論家、中村光夫は三島由紀夫の小説について「『金閣寺』はニュース・ストーリーの形をとった小説です。昭和二十五年の夏京都の鹿苑寺^{ろくおんじ}の有名な金閣が、寺僧の放火によって焼失した事件を素材として、六年後の昭和三十一年に書かれました¹⁰⁾」と書いている。

ニュース・ストーリーは、英語では報道記事一般を指すから、この場合は一種の和製英語、

最近のニュースで話題になった事件を物語化する小説を指して用いられている。小説『金閣寺』がニュース・ストーリーであることに異論はないが、ただ、わたしは小説家があつかった事件は1950年の金閣寺放火事件というよりはむしろ、1955年の金閣寺再建のニュースなのではないかと考える。全集の解題には三島由紀夫が自作を語った「室町の美学—金閣寺」という東京新聞、1965年2月20日に載った文章が収録されている。小説家は「私にとって焼けてしまった金閣は、大して魅力のあるものではなく、子供のころ見たのをおぼえてゐるだけで大して美しいと思った記憶ものこってゐない。作中の主人公がそれを美しいと思へば十分なのであって、その点では主人公への共感はありませんのである¹¹⁾」とモデルを突き放して試している。

たしかに戦時中の金閣は金色ではなく黒色、庭園もかなり荒れており、辛うじて侘び寂びの美学で説明されていたはず。わたしにはもうひとつ、以前から不思議に思うことがあった。金閣はたしかに明治30年に国宝に指定されたのであるが、その後の皇国史観からみれば鹿苑寺を建立した足利家は南朝を支持した国賊扱いであったはず。敗戦後の金閣寺再評価は進駐軍向け英文ガイドブックから始まった。全集におさめられた三島由紀夫の語りを信じるなら、小説家にとって焼ける前の金閣寺はどうでもよく、皇国史観さえ彼にとってさほど重要ではなかったのだ。

おまけに三島由紀夫は、自分は取材中に夕陽をあびた金閣に感銘をうけたが、雪の日の金閣は、じつは絵葉書でしか知らないと言う。夕陽をあびて輝く金閣にしろ、彼が買った絵葉書の金閣にしろ、このような素材を頭において雪の朝、金閣の場面が描かれたのだとしたら、小説のなかで雪をいただいて輝いていたのは再建された新金閣であった。実際、小説家は先に引いた文章のつづきでは「私のむしろ好きなのは、新築の、人が映画のセットみたいだと悪口を言ふ、キンキラキンの金閣寺である。あそここそ室町の美学があり、將軍義満の恍惚があつたのだと思ふ」と述べ、重ねて「作品中の旧金閣のイメージには、かくて、作者の新金閣のイメージが多分に導入されてゐるのである¹²⁾」と結んでいる。そうであるならば、三島由紀夫の『金閣寺』は、巨額の費用をかけた金閣寺再建を物語化して、金閣を現代の京都観光における最大のスポットとすることに貢献したニュース・ストーリーであつたと言えるであろう。

4. 小説『金閣寺』を占領期京都地図の上におく

立命館大学地理学教室の協力をえて、わたしはこれまで占領期京都の地図を数種類、作成してきた¹³⁾。そのたびに発見があつた。今回も、小説『金閣寺』を念頭におきながら、占領期の金閣寺界限地図を作製してみた。



占領期の金閣寺界隈地図

(『京都市明細図』(京都府立総合資料館所蔵), 京都府文書, 京都市編 (1975)『京都の歴史8』(学芸林社)および本論文をもとに西川祐子と河角直美が作成。)

じつはこれまでの占領期地図のなかでは金閣寺界隈は謎の多い地区であった。謎の原因は、金閣寺から遠くない元住友別邸が接収されてCIC（対敵諜報部隊）本部になっていたことによるということはわかっていた。CIC本部自体は、進駐軍作成の占領期地図にも載っている。進駐軍用観光地図にも表記されている。今は修道院と施設になっている広い敷地には塀がめぐらされ、樹木が生い茂っていて見通しがきかない。周辺の住民に占領期インタビューをするたび、たとえば行政文書などに記録された進駐軍による接収住宅リストには載っていない住宅の接収があり、短期間で接収解除や、別の住宅の接収があったらしいことがわかった。また住友別邸からは西大路通りをへだてた立地となる現在の立命館大学衣笠キャンパスの一部にあたると思われる場所に、進駐軍のかまぼこ型兵舎がならんでいて周辺が鉄条網でかこまれていたと語る住民もある。

昔、自分の家は金閣寺の敷地内にあった洋館住宅であったが、進駐軍に半分が接収され、同居の形で住んでいた。金閣寺炎上の日には同居していた進駐軍将校が消火器をもって火事現場に駆けつけたと記憶していた老婦人もある。将校は教養あるアメリカ人であったが家族とかわす会話から世情をさぐっていると感じたという。別の、昭和初期に建築された和洋折衷型住宅の住民の証言によると、その家の二階は占領下の一時期、進駐軍の秘密事務所となっていた。アジア系容姿をもち平服を着た進駐軍将兵が夕方になると出入りし、その報告がCIC本部に届

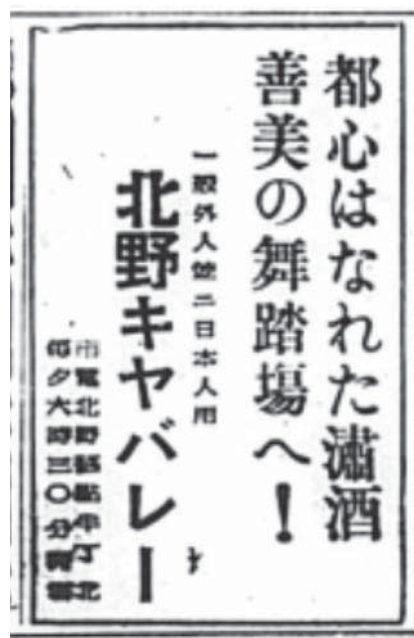
けられた、という。尾行されていたのは主に旧ソ連からの引揚者、あるいは政治運動や組合運動の活動家であったらしい。その家にある夜、泥棒がはいて家族が所有していたシンガーのミシンを持ち去ったため、秘密事務所は急いで転居していったそうである。

町中にあった別の秘密事務所にはタイピストとして勤務した経験をもつ女性は、事務所はめだたないよう民家におかれていた、採用試験では嘘発見器の上に座らされてこわく、ここに勤務することは口外してはならないと感じていたと語る。タイプすべき報告をもたらすのはやはり平服でアジア系アメリカ人、情報はキャバレー、ダンスホールで集めているようであった、毎日もたらされる報告を管理するのは白人の将校であったと述べているところから、金閣寺周辺の秘密事務所も同様の仕組みであったと考えられよう。諜報活動は、誇示ではなく隠蔽を旨とする一種の軍事行動なのであるから、記録公開の時代となっても最後まで解明が困難である。インタビュー中には住民から、占領期のあいだ、進駐軍はいったいここで何をしていたのでしょうか、と逆に尋ねられるほど、近隣の住民たちは解けない謎、口外無用の雰囲気を感じていたようだ。

断片的証言のほかに、都市伝説のようにして語り継がれた事件もある。1946年2月8日午後11時に市電北野線を走っていた満員の通称チンチン電車が、堀川をわたる鉄橋で脱線、転落し、米兵をふくむ11名の死者と多数負傷者がでた。小さな車両が、さほどの高さではない堀川に落ちたのであるが、犠牲は大きかった。この事故は未だにいろいろな形で語り継がれている。ふだん市電は利用しない進駐軍が終電車に乗っていたのは上七軒の歌舞練場が接収されてつくられた北野キャバレーからの帰りだったからである。酔っぱらった「シンチューグン」が、女性運転手にいたずらをしかけ、そのために手回しブレーキを回すことができなかったのだ。など



京都新聞、1946年2月9日付記事



京都日日新聞、1946年5月25日付記事

占領期の金閣寺と金閣寺界限—南相旭著『三島由紀夫における「アメリカ」』第2章を読むために（西川）

など人々は口々に語る。共通するキーワードは「チンチン電車」「キャバレー」「ダンス」「飲酒」「シンチューゲン」である。深夜に女性運転手というところなどに疑問があるが、敗戦直後には男性の復員がまだなかったため、女性運転手が養成されていた事実はある。

市電北野線は当時、京都駅と北野天満宮を結ぶ路線であった。始発が北野天満宮の鳥居近くであった。上七軒の歌舞練場が接収されてつくられた北野キャバレーは始発の北野神社駅から歩いてゆける距離にあった。「占領期の金閣寺界限地図」における紫色着色建物の分布を参照していただきたい。そのうち上七軒が旦那衆の遊ぶ遊妓のまちであるとしたら、北野線をもうすこし下がったところには娼妓のまち五番町がある。いずれも小説『金閣寺』の主人公の生活範囲であった。北野線の終点の京都駅には現在の関電ビル、当時は接収されてホテル・ラクヨーと呼ばれていた進駐軍宿舎があった。記録によれば同ホテルは進駐軍将兵、軍属のほか、欧米からのバイヤーの宿泊も多かった。

むろん1946年のチンチン電車墜落事件と1950年の金閣寺放火事件とは、同じ占領期とはいえ四年の時間差がある。しかし、市電墜落事件はいくつかの手掛かりをおしえる。まず北野キャバレーが後には日本人客をうけいれるダンスホールとなったが、当初は進駐軍専用の慰安的な施設であったこと、住民はキャバレー帰りの酔客をみなれていたこと、金閣寺界限は進駐軍の拠点のひとつであった、がそれを見えなくする配慮があったのに、市電墜落事件による米兵死亡があって、そこへさまざまな事実と憶測が付着して語り伝えられていることなどである。

5. 「占領」のジェンダー表象

政治文化がジェンダー表象で表現されることはよく知られている。従来の政治文化においてはしばしば、勝者が男性に、敗者は女性に擬せられる。近代の天皇像の変遷、その演出の変化を政治文化の問題として解明してきたのは主に女性史、女性学による画像、表象分析研究であった。表象の解釈を行うだけでなく、ジェンダー表象の仕組みそのものを批判的に解明してきた。よく知られている天皇のマッカーサー訪問に際して撮影された二人のツーショットの写真は、北原恵の研究によればアメリカ側が前もって立ち位置をきめて撮影したものであった¹⁴⁾。戦争中にはどの家庭にもかけられていた天皇皇后の並び立つ御真影写真の、天皇が立つべき向かって左位置に連合軍総司令官マッカーサーが、本来は皇后が立つ右位置に天皇が立っている写真が新聞に掲載された。立ち位置の入れ替わりは、天皇像を女性化する効果があった。国民は占領期の現実の権力者がマッカーサーであることを思い知ったのであった。日本側もまた、天皇像を女性化することにより、その戦争責任を忘れさせるという戦略を積極的に採用した。戦争中は軍装に身をつつみ白馬にまたがる天皇像は一転し、敗戦後の天皇像は一九四六年元旦の人間宣言以降は平服である背広姿で家族に囲まれたスナップ写真で知られるようになった。

小説家三島由紀夫は、表象の政治に敏感であった。もういちど小説に戻り、小説『金閣寺』を地図の上で読み直すとともに、地図に特有のリアリティに照らして表象の政治を故意に誤読、深読みすることにしよう。この場面では登場人物の赤い外套の女性は敗者日本の象徴であって、直截に「女」と呼ばれる。早朝にウイスキーの臭いをさせながら雪の金閣寺にジープを乗りつけた「米兵」は男性であり勝者、残酷で暴力的であると同時に女を抱き起す懇懇な動作、英文

観光案内を戯文として節をつけて読み上げる一癖ありそうな教養からして、CICに勤務する諜報将校であるかもしれない。主人公の青年僧は女連れの米兵の訪問にかくべつ驚きはしない。彼は金閣観光にやってくる女連れ米兵を見慣れていた。寝間着のうえに赤い外套をまとった「女」は、キャバレーのダンサーまたは、当時、オンリーと呼ばれていた米兵の現地妻であり、近くに部屋をもっていたであろう。登場人物「私」のモデルは大学では中国語学科の学生だったのだから英語の通訳を頼まれる設定にはすこし無理があるが、この場合は戦後義務教育レベルの英語でかまわなかった。小説家は、主人公の深いコンプレックスの原因の一つにモデルの青年にもあった吃音をあげるが、経をあげるとき、英語をしゃべるときはふしぎと吃音が出ないと付け加えるところで小説のリアリティが増す。米兵からほとんど無視されながらも米兵に協力せざるをえない「通訳」は、最初、雪の上に倒された「女」を思わず助け起こそうとして「女」と同じ位置から同様の視線で米兵を見上げる。しかしおそらくは米兵の子どもである胎児を米兵のかわりに抹殺すべく「女」の腹を踏みつけるときの彼が味わう嗜虐的な感覚は「男」の側にある。文化人類学者「アメリカ」と原住民「日本」の通訳をする「ネイティブ・インフォーマント」は勝者と敗者のあいだをこのように行き来するのだ。

小説家は作中人物青年僧の母親にいたるまで、この小説のすべての女性登場人物たちを一種の嫌悪感をいだきながら描いている。女性嫌悪はしばしば女性で表象される敗戦国、敗北という現実をひきうけている当時の日本にたいする嫌悪でもある。

小説家は『金閣寺』で「占領」を描いた後には、青年僧に憑依することをやめた。その代り戦後日本を代表し表象するインフォーマント役として自分の身体を鍛え筋肉をつけて、もうひとつの象徴、男性的な日本を演じはじめた。

南相旭は川端康成が女性的日本、三島由紀夫が男性的日本を代表するという通説があると述べるにとどめた。この通説からつづけて、ノーベル賞争いで女性的日本を描いた川端到敗北した男性的日本を代表しようとする三島はノーベル賞以上の衝撃度をもつパフォーマンスを探索することになったというストーリーを読むことも可能であろう。しかし三島由紀夫の男性的「日本」、川端康成の女性的「日本」、どちらの「日本」も何をだれのために表象し、だれを代表するのだろうか。敗戦直後の焼け跡無頼派作家たちは日本文化を再構築する意図がなく、自分以外の誰かを代表するつもりもなかったところが新鮮だった。日本文化の再構築とは、そうではない方向へもう一度、国民を統合しようとする政治的行為であろう。わたしは南相旭の批評作品を、表象の政治を解体する終わりのない作業の一環として読んだ。連続講座のおかげでこの共同作業に参加できたことに深く感謝します。

注

- 1) 西川祐子「古都の占領—占領期研究序論」、『アリーナ』第10号、発行：中部大学、発売：風媒社、2010年、pp.143 - 162。「続・古都の占領—忘却に抗して」、『アリーナ』第15号別冊、2013年、pp.2 - 12参照。
- 2) 南相旭『三島由紀夫における「アメリカ」』、p. 38。
- 3) 同上、p. 104。
- 4) 同上、pp. 105 - 106。
- 5) 『潮騒』の英訳（1956年）と『近代能楽集』の英訳出版後、三島由紀夫が出版社の招待によってアメ

占領期の金閣寺と金閣寺界隈—南相旭著『三島由紀夫における「アメリカ」』第2章を読むために（西川）

リカ滞在をした一九五七年前後を指す。

- 6) 同上, p. 18。
- 7) 『三島由紀夫全集』第六巻, p. 654。なお同全集は旧仮名遣いを用いている。
- 8) 同上, p. 752。
- 9) 同上, p. 708。
- 10) 中村光夫『『金閣寺』について』（1960年。現在は新潮文庫版『金閣寺』の巻末に収録されているテキストで読むことができる）。
- 11) 『三島由紀夫全集』第6巻, p. 752。
- 12) 同上。
- 13) 先にふれた西川祐子「古都の占領」と「統・古都の占領」参照。
- 14) 北原恵「表象の“トラウマ”——天皇／マッカーサー会見写真の図像学」『心の危機と臨床の知 ①——トラウマの表象』森茂起編, 新曜社, 2003年, pp. 93 - 119。

参考・引用文献

- 安藤武『三島由紀夫「日録」』, 未知谷, 1996年。
- 加藤政洋, 住沢杏子, 福島幸宏『『京都市明細図』における地図表現の特色とその精度に関する予察——『紫区画』に着目して——』, 『立命館大学人文科学研究所紀要』第103号, 2014年, pp.183 - 204。
- 北原恵「表象の“トラウマ”——天皇／マッカーサー会見写真の図像学」, 『トラウマの表象と主体』, 新曜社, 2003年, pp. 93 - 119。
- 酒井順子『金閣寺の燃やし方』, 講談社, 2010年。
- 中村光夫『『金閣寺』について』『金閣寺』, 新潮文庫, 1960年, pp. 362 - 368。
- 南相旭『三島由紀夫における「アメリカ」』, 彩流社, 2014年。
- 南相旭「占領期／アメリカ」, 有元伸子, 久保田裕子編『21世紀の三島由紀夫』, 翰林書房, 2015年, pp. 228 - 231。
- 西川祐子「古都の占領——占領期研究序論」, 『アリーナ』第10号, 発行：中部大学, 発売：風媒社, 2010年, pp.143 - 162。
- 西川祐子「統・古都の占領——忘却に抗して」, 『アリーナ』第15号別冊, 2013年, pp.2 - 12。
- 三島由紀夫『三島由紀夫』全集第六巻, 新潮社, 2001年。
- 水上勉『金閣炎上』, 新潮社, 1979年。
- 水上勉『五番町夕霧楼』, 文芸春秋新社, 1963年。

